

# マンガで伝える 稲作技術

「絵で見る稲作技術12カ月」は日本の稲作技術をマンガで描いたテキストだ。コメの生産量が伸び悩む東ティモールで、現地語に訳されたテキストが技術者や農民たちに役立っている。



テキスト「絵で見る稲作技術12カ月」。英語版を現地のティン語に翻訳した

東ティモールの稲作は化学肥料や農薬を使わない低投入型の伝統農業である。貧しい農民にとって農業資材の調達に難しいのが原因だ。そのためコメの生産量は、日本がヘクタール当たり平均5・5トンであるのに対し、東ティモールは1トン前後と低い。

そこで稲作の歴史が浅く、技術が体系化されていない東ティモールに日本の技術を伝えようと、日本の農家が使用する、稲作の基本的な技術が描かれたマンガテキストを現地の言葉に翻訳して利用した。「日本の技術をそのまま翻訳したものが東ティモールで役立つだろうか」と危惧していたが、資機材を活用することで収量を伸ばせることを知ってもらい、農民のモチベーションを高めるには、現地の非識字率57%（農村では80%）を考慮しても、ビジュアルによる技術移転が効果・効率的であると判断した。

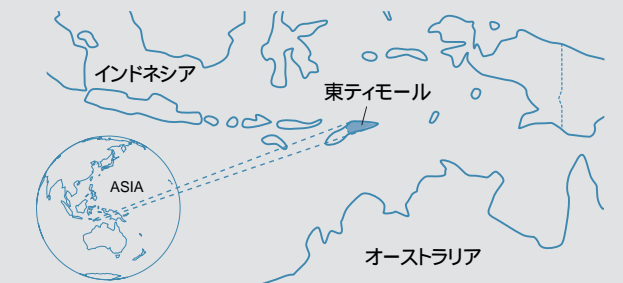


テキストを使って稲作技術を学ぶ農業高校の学生たち

農業大臣や国連開発計画（UNDP）アドバイザーから力強いサポートも得られ、30

0部を作成。うち150部を農林水産省（MAFF）の職員の能力向上に役立てるとともに、残りの150部を東ティモール大学、国連食糧農業機関（FAO）、UNDP、世界銀行、ハワイ大学稲作プロジェクト、オーストラリアの種子増殖プロジェクトなどに配布した。MAFFはラジオなどで紹介し、東ティモール大学は学生の指導教材として活用、ティリ市にあるFAO事務所は閲覧コーナーを設けた。さらにUNDPの稲作プロジェクトでも利用されるなど、その活用範囲は広がっている。

このテキストが各方面で技術を検証する手段となり、その結果、技術者や農民から「収量をもっと高めたので基本技術を教えてほしい」という声が上がれば本望だ。貧困や失業が減らない現状への国民の不満は強い。今年4月に政府軍の内紛から騒乱が激化、治安が悪化して



from Timor-Leste

「世界HOTアングル」では、世界各地でJICA事業に携わる皆さんからの投稿を募集しています。ご応募・お問い合わせは、[jicagap-opinion@jica.go.jp](mailto:jicagap-opinion@jica.go.jp) まで。

# 養蜂マニュアルで おいしいはちみつ作り

初心者や文字を読めないパラグアイの養蜂家のために、JICAがマンガ版の養蜂マニュアルを作成した。全国の養蜂関係者から問い合わせが殺到し、はちみつ生産量が大きく伸びている。

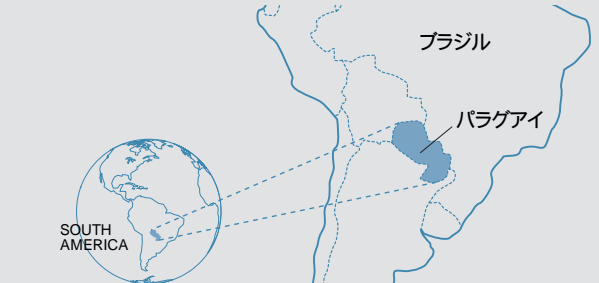


パラグアイの養蜂家。養蜂を副収入にする農家が全国に散在している

パラグアイの人々は先住民族のグアラニー族と欧州系の混血がほとんどで、スペイン語とグアラニー語の両方を話す人が一般的だ。しかし、特に農村地域では圧倒的にグアラニー語を使う人々が多く、パラグアイ人の59%は家庭内でグアラニー語を使用する。しかも読書の習慣はなく農村で暮らす人々の10・3%は文字を書くことができない。

このような農村地域の小規模農家を対象に、JICAは「養蜂業多様化支援計画」プロジェクトを実施中だ。現在、日系ブラジル人の養蜂家が第三国専門家（日本以外の国からの専門家）として派遣され、養蜂のノウハウを持たない人々に養蜂技術のイロハから教えている。しかし、

養蜂を副収入として生計を立てる小規模農家は全国に多く散在しており、一軒一軒農家を回って指導できないのが現状だった。そこで、初心者や文字の読めない養蜂家も理解できるようにと作成されたのが「マンガ版養蜂マニュアル」だ。マニュアルはイラストを使って養蜂技術を分かりやすく示したものだ。今年3月に行われたマニュアルの発表会では、現地のマスメディアにも大きく取り上げられ、直後は連日のようにマニュアルについての問い合わせがJICAパラグアイ事務所に殺到し、うれしい悲鳴だった。



from Paraguay



親しみやすいイラストで描かれていて、初心者や文字が苦手な人にも分かりやすい